

部活動における安全管理と事故防止

岩手県立大迫高等学校

(令和7年8月25日 改訂版)

部活動は学校において計画する教育活動である。生徒の安全が確保されることが大前提であり、実施については顧問だけでなく複数の指導者による指導・監督体制を整え、安全管理を徹底することとする。

また、以下の1～9に示すように、日頃から指導者と生徒の事故防止に対する意識を高めるとともに、事故を未然に防ぐための行動が適切にとれるようにする。

1 健康状態の把握

- (1) 生徒に、日ごろから自分の健康管理について関心や意識を持たせ、適切な休養や栄養の補給に留意させる。
- (2) 活動に際しては、生徒の健康観察を適切に行い、体調が優れない生徒に対しては無理をさせず、活動内容を制限するか休ませるかを適切に判断する。
- (3) 健康診断（心電図検査等）で異常が認められた生徒に対しては、医師の指示に従うとともに、養護教諭・学級担任・保護者等との連携を密にし、健康状態について常に把握しておく。

2 個人の能力に応じた指導

- (1) 学年や個人差に十分配慮した活動内容と方法を工夫し、段階的計画的な指導を行う。
- (2) 新しい内容（技）や難易度の高い技術の練習は、必ず顧問の指導の下で実施するとともに、個人や集団の能力に応じた練習方法で行わせる。

3 運動の特性を踏まえた合理的な指導

- (1) 運動の特性を踏まえた準備運動及び基礎的・基本的な技能を大切にされた練習を行うことで事故を未然に防ぐ。
- (2) 練習の目的及び内容や効果的な練習方法を、生徒に説明し理解させる。
- (3) 安全上特に配慮が必要な競技種目及び練習内容については、段階的な指導をより徹底するとともに、必ず顧問の指導の下で実施する。

4 施設・設備・用具の安全点検と安全指導

- (1) 定期点検日を設けるなど、学校全体で安全意識を高めるとともに、使用前には必ず練習場所・使用器具の整備・点検を実施し、生徒にも安全確認の習慣化を図る。
- (2) 施設・設備・用具は、使用方法に従って正しく使用するとともに、内在する危険性を生徒に理解させ、事故が起きないように常に注意する。
- (3) 投てき物、ボール、矢などを使用する場合は、十分に周囲の安全を確認するとともに、全な活動を確保するため、技のルールや練習する上でのきまり等が確実に励行されるよう指導を徹底する。

5 天候や気象を考慮した指導

- (1) 気象庁が発表する情報や環境省熱中症予防情報サイト上の暑さ指数等の情報に十分留意し、気温・湿度などの環境条件に配慮した活動を実施する。その際、活動の中止や、延期、見直し等柔軟に対応を検討する。活動前、活動中、終了後にこまめに水分や塩分を補給し、休憩を取るとともに、児童生徒等への健康観察など健康管理を徹底する。熱中症の疑いのある症状が見られた場合には、早期に水分・塩分補給、体温の冷却、病院への搬送等適切な応急手当等を実施する。
- (2) 暑さや雷等に対して、練習の中止や中断の判断が的確に行えるよう、情報の収集に努めるとともに、判断基準を明確にしておく。(p 3 に WBGT による活動制限、p 4 に雷事故防止対策)

● 雷事故防止対策

- 1 雷注意報が発令されている場合、その地域での屋外活動をできるだけ控える。
- 2 屋外で活動する場合、引率者は気象庁ホームページで公開されている「雷活動度（雷ナウキャスト）」を用い、活動予定場所において、現在から60分後の予想まで活動度2以上になっていないか確認する。
活動度2以上の場所では屋外の活動はしない。
- 3 活動中も可能な限り雷ナウキャストを確認し、活動度2以上になっていないか確認する。
- 4 活動場所で雷鳴・雷光を確認した場合は、直ちに活動を中止し、安全な場所に避難する。（10km以内に雷雲あり）
- 5 以下のような、雷の前兆が活動場所で発生した場合には、直ちに活動を中止し、安全な場所に避難する。

- ・ 黒い雲が近づく（覆われる）
- ・ 急に冷たい風が吹く、急に激しい雨が降る、突風
- ・ 霰（あられ）、雹（ひょう）が降る
- ・ AMラジオにノイズが入る

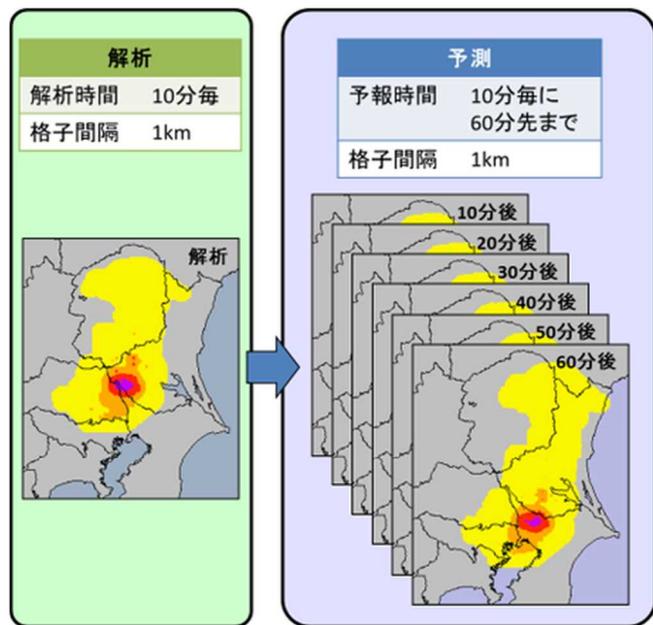
【安全な場所】

鉄筋コンクリート建築、自動車（オープンカーは不可）、バスや列車の内部。木造建築の内部も基本的に安全だが、全ての電気器具、天井・壁から1m以上離れること。

【近くに安全な場所がない場合】

電柱、煙突、鉄塔、建築物などの高い物体の頂点を45度以上の角度で見上げる範囲で、その物体から4m以上離れたところ（保護範囲）に退避する。高い木の近くは危険なので、最低でも木の全ての幹、枝、葉から2m以上は離れる。姿勢を低くして、持ち物は体より高く突き出さないようにする。

- 6 活動の再開は、雷ナウキャストで活動度2未満、または雷鳴・雷光が完全に止んでから20分以上経過後とする。



活動度	雷の状況	
4	激しい雷	落雷が多数発生している。
3	やや激しい雷	落雷がある。
2	雷あり	電光が見えたり雷鳴が聞こえる。落雷の可能性が高くなっている。
1	雷可能性あり	現在は雷は発生していないが、今後落雷の可能性はある。

6 事故対応

- (1) 「学校事故対応に関する指針」(平成 28 年 3 月 文部科学省)に基づき、危機管理マニュアルの見直し・改善を図り、事件・事故災害の未然防止とともに、事故発生時の適切な対応が行われるようにするための、故対応に関する共通理解と体制整備の促進を図る。
- (2) 生徒にも保健体育科等の授業や部活動を通して応急手当に関する指導を行うとともに、事故発生時の行動の仕方についても指導する。

7 部活動のきまりについて

- (1) 部活動への加入・転部・退部
部活動への加入は任意とする。部活動への参加を奨励し、部に加入する場合は「部加入届」を提出する。転部、退部についてはそれぞれ「転部願」、「退部願」を作成し、担任・顧問を経由して生徒指導部 に提出する。
- (2) 部室の使用・管理
部室の使用については、その部に所属する部員のみとし、用具を管理保管するとともに、更衣の場とする。使用時間は放課後等の活動時のみとする。
- (3) 対外活動(大会参加・練習試合)への参加について
対外活動については「対外活動参加願」を提出し活動許可を受ける。

8 その他

- (1) 体罰等の禁止について
部活動の指導者は、いかなる理由があっても体罰を行ってはならない。部活動の指導では指導者と部員のコミュニケーションに基づく適切な指導を行い、体罰や不祥事(ハラスメント行為等)のない指導に徹する。
- (2) 保護者の理解と協力について
保護者の理解と協力は、部活動運営において不可欠であり、指導に関する基本方針・練習計画・活動時間・休養日等を明確にし、保護者に示す。
- (3) 複数の部活動が施設を共有する際は以下について留意することとする。
日常的にグラウンドや体育館等の活動場所を複数の部活動が共用して練習するような場合、他の部活動の練習や生徒に対して注意を払う意識が薄れたり、配慮すべき安全対策を怠ったりすることがある。そこで、練習場所を防護(防球)ネットやカラーコーン等により明確に活動場所を区分して混在しないようにしたり、ボール等の用具が他の活動場所に飛んでいった場合の合図の確認を双方で行うこととする。複数の部が施設を共有する場合は、関係する部間で禁止事項や活動の制限事項等について、事前に共通理解を図る。練習開始時には、禁止事項等について各部で確認し、練習後にはケアレスミスや危険を感じたような出来事について、顧問等と生徒同士で報告し合い、次の練習に生かすとともに、他の部と情報共有を図る。

9 部活動における安全対策状況調査結果を踏まえた安全対策のポイント

(1) 弓道部

予想される危険

- ・道場の安全管理が不十分で、矢が道場外に飛び出して、人に当たる危険性が高い。
- ・弓に傷があって、引き分けた際に裂けて射手がけがをする危険性が高い。
- ・矢が短く引き分けた際に弓の中に入り込み飛び出したりする危険性が高い。
- ・矢取りの際に射手との連絡が不十分で、矢取りに入った者に矢が当たる危険性が高い。
- ・巻き藁に放った矢が、跳ね返り射手に当たる危険や外れて周囲の者に当たる危険性が高い。

事故防止対策

- ・定期的な施設・用具の安全点検の徹底 ・指導者の許可無しに行射をしないルール・マナーを遵守する。
- ・安全な場所以外では絶対に弓を引かない。
- ・たとえ矢をつがえていなくても、人のいる方向に弓を引かない。
- ・巻き藁練習の際には、的前に立たない事と、前後左右の近い所に人がいないことを確認する。
- ・一人一人の上達に応じた練習メニューの提示。
- ・自己の技能に応じた強度の弓具等を使用する。
- ・矢取りは声と目で安全確認をした上に、赤旗や警告灯をつけてから入る。
- ・道場では私語を慎み、挨拶や矢取りの声はしっかり出す。
- ・傷のある弓や矢を使わない。
- ・射位とその間隔を守り、極端に狭いところで行射をしない。

ヒヤリハット事例

- ・矢の回収の際不用意に的の付近に近づいた。
- ・矢を運搬中に蛍光灯を割ってしまいそうになった。

(2) バドミントン部

予想される危険

- ・給水不足による熱中症や脱水症状 ・周囲の確認不足による生徒同士の接触等による負傷
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷

事故防止対策

- ・適度な水分補給の機会確保 ・危険なプレーを防止するための指導（コンタクトの仕方）
- ・活動前の体調把握 ・十分な準備運動とストレッチ
- ・指導者、生徒が応急手当手順や緊急時の対応を把握・確認

ヒヤリハット事例

- ・支柱を運搬中に誤って落としてしまい足の上に落してしまうところだった。
- ・シャトルが顔面にあたってしまった。

(3) 自転車競技部

予想される危険

- ・自身の人為的要因
- ・他人からの人為的要因

- ・運動や競技の特性による要因
- ・体力・技能や発達段階による要因
- ・活動計画や安全対策による要因
- ・施設・設備・用具等の要因
- ・自然現象や自然環境等の要因
- ・複合的な要因

事故防止対策

- ・生徒に、日頃から自分の健康管理について関心や意識を持たせ、適度な休養や栄養の補給に留意させる。
- ・活動に際しては、生徒の健康観察を適切に行い、体調が優れない生徒に対しては、無理をさせず、活動内容を制限するか、休ませるかを適切に判断する。
- ・健康診断（心電図検査等）で異常が認められた生徒に対しては、医師の指示に従うとともに、養護教諭、学級担任、保護者等との連携を密にし、健康状態について常に把握しておく。
- ・合宿等の場合は、日常と異なる環境で活動する際は、対象生徒の経験、技能、体力等を踏まえた活動になるよう努める。
- ・生徒の学年や発育・発達等の個人差に十分配慮した活動内容と方法を工夫し、段階的、計画的な指導を行う。
- ・新しい内容（技）や難易度の高い技術の練習は、必ず顧問の指導の下で実施するとともに、個人や集団の技能レベルに応じた練習方法で行う。
- ・疲労が著しい場合や技能が未熟な場合には、練習への参加や試合への出場を見合わせる等、生徒の健康に十分配慮する。
- ・新入生や初心者には、説明のための時間を別途設けて、安全に対する意識の向上に努める。
- ・運動の特性を踏まえた準備運動及び基礎的・基本的な動作を大切に練習を行うことで事故を未然に防ぐ。
- ・練習の目的及び内容や効果的な練習方法を生徒に理解させる。
- ・安全上特に配慮が必要な競技種目及び練習内容については、段階的な指導をより徹底するとともに、必ず顧問の指導の下で実施する。
- ・施設・設備・用具は、使用方法に従って正しく使用するとともに、内在する危険性を生徒に理解させ事故が起きないように注意する。
- ・施設・用具・器具の保管や固定を行い、用具の転倒や破損による事故が起きないように注意する。
- ・使用前は、活動場所、使用用具の整備・点検を実施し、生徒にも安全確認をする習慣を身につけさせる。使用後は、用具等の保管場所や収納の方法を決めて整理・整頓に努め、安全管理の徹底を図るよう指導する。
- ・活動時の気象条件に留意する。特に高温・多湿下の状況では、適切な水分の補給や健康観察を行い、熱中症に十分注意する。
- ・暴風や雷等に対して、練習の中止や中断の判断が的確に行えるよう、情報の収集に努めるとともに、判断基準を明確にする。

ヒヤリハット事例

- ・練習中に道に迷ってしまい一時行方がわからなくなった。
- ・濡れた路面で滑ってしまい転倒してしまうところだった。

(4) 山岳部

予想される危険

- ・熱中症、脱水、低体温症による行動不能
- ・難場での怪我、下山中の浮き石による転倒事故
- ・荒天や雷に伴う天候の急変
- ・野生動物（クマ、スズメバチ等）との遭遇

事故防止対策

- ・登山前の装備点検で対策を講じる。特に、食料・飲み物・救急用具等、非常時のことを考慮し準備をする。
- ・難場や下山の際には手袋の装着を必須、また、必要に応じて長袖を着用する等、怪我防止に努める。
- ・事前に天候状況を確認し、登山の可否を判断する。また、現地において多少なりとも雷の兆候を確認した場合は、直ちに登山を中止する。
- ・野生動物の出没状況を、事前の登山情報で確認し、登山の可否を判断する。合わせて、登山の際には、クマよけの鈴を身に付ける。

ヒヤリハット事例

- ・登山の際に急激な天候悪化により下山不能になるところであった。

(5) 柔道部

予想される危険

- ・実戦練習による負傷（脱臼、骨折、脳しんとう等）
- ・給水不足による熱中症や脱水症状
- ・周囲の確認不足による生徒同士の接触等による負傷
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷

事故防止対策

- ・道場の換気、扇風機の利用、適度な水分補給の機会確保
- ・活動前の体調把握
- ・活動前の周囲の安全確認
- ・十分な準備運動とストレッチ
- ・指導者、生徒が応急手当手順や緊急時の対応を把握、確認
- ・生徒の体力、知識、技能の把握

ヒヤリハット事例

- ・投げ込み練習の際に、投げられた者の上に重なって投げられるところであった。
- ・畳の隙間に足をとられ、大きなけがにつながるところであった。

(6) 吹奏楽部

予想される危険

- ・熱中症 ・楽器を扱う上での怪我（落とす、ぶつかるなど）
- ・打楽器演奏による腱鞘炎 ・管楽器演奏に伴う体調不良（楽器の吹きすぎによる酸素不足など）

事故防止対策

- ・夏場はエアコンの適切な使用と換気
- ・水分補給 ・楽器の扱い方についての研修および日頃の声掛け
- ・適切な休息

ヒヤリハット事例

- ・夏季の練習中に気温が高すぎ、熱中症になる危険性があった。

（7）JRC 部

予測される危険

- ・ボランティア活動中などの熱中症やケガ

事故防止対策

- ・こまめな水分補給
- ・活動前後の体調確認

ヒヤリハット事例

- ・募金活動の際に熱中症になるところであった。

（8）神楽部

予想される危険

- ・給水不足による熱中症や脱水症状
- ・周囲の確認不足による生徒同士の接触等による負傷
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷

事故防止対策

- ・適度な水分補給の機会確保
- ・活動前後の体調確認
- ・活動前の周囲の安全確認
- ・十分な準備運動とストレッチ
- ・生徒の持病や治療中の状況把握
- ・指導者、生徒が応急手当手順や緊急時の対応を把握、確認

ヒヤリハット事例

- ・和太鼓を運搬中に足の上に落としそうになった。

（9）学芸部美術書道班

予想される危険

- ・美術室にはエアコンが無いので、窓の開閉による換気、水分補給を頻繁に行う。
- ・工具を使う作業では安全面に気を付ける。

事故防止対策

- ・適度な水分補給の機会確保
- ・活動前後の体調確認
- ・活動前の周囲の安全確認
- ・生徒の持病や治療中の状況把握
- ・指導者、生徒が応急手当手順や緊急時の対応を把握、確認

ヒヤリハット事例

- ・作品作成に夢中になり、水分補給を失念し熱中症のような症状に陥った。

(10) ウェイトトレーニング

予想される危険

- ・練習場所の未整理、安全具の未装備（プレートのバランス確認、固定されているか等）
- ・用具の破損や器具の整備不良。
- ・個々の能力以上による練習、誤ったフォームによる練習。
- ・十分な準備運動を怠り、基礎基本の習得が不足。
- ・周囲の安全確認、選手同士の声掛け、意思疎通の怠り。

事故防止対策

- ・使用前の器具、用具の点検を十分に行う。
- ・ストレッチ等を練習の前後に必ず行う。
- ・軽い重量からウォーミングアップを行う。
- ・正しいフォームを身につける。
- ・使用する器具の安全確認を怠らない。
- ・整理整頓を行う。
- ・利用者、補助員ともに使用上の決まりを守り、安全を最優先する。

ヒヤリハット事例

- ・バーベルの留め金具が緩み、プレートが落ちそうになった。
- ・補助する者が見つからない状況で行い、バーベルを自分の体の上に落としそうになった。